令和２年７月 31 日（金）掲載
神奈川新聞社提供（複製禁止）

「コロナ禍の世界」⑪
横浜市駐在員リポート

在留邦人 往来を切望

上海

1月に中国・武漢が封鎖され、驚いた在留邦人は一時帰国する、中国にとどまる、家族を日本に退避させるとそれぞれ行動した。3月下旬から日本人は中国に入国できなくなったが、5月下旬以降は新規査証があれば入国可能となった。ただ航空券は高額で、2カ月ほど先の座席しか取れず、入国後もホテルで2週間隔離される。

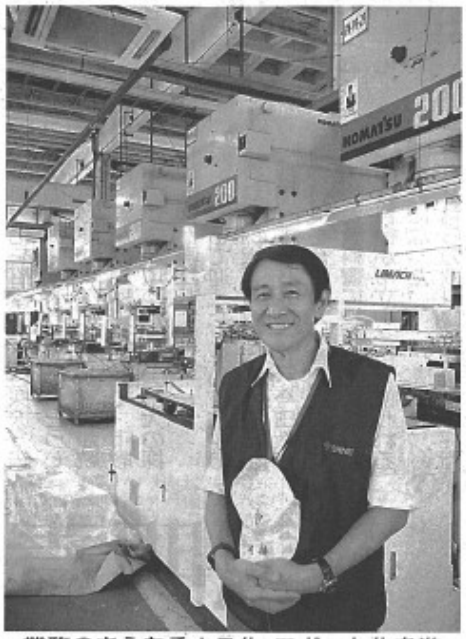
そのため、ビジネス上の課題も多い。日本から出張できず、技術者も訪中できないため、プロジェクトの遅れやメンテナンスの不備が生じている。人事異動への影響もあり、従来の業務からの転換が必要だ。

横浜市金沢区に本社・新鋭産業がある蘇州新鋭電子工業有限公司（蘇州市）はプレス部品などを製造し、それを電子機器に組み立てている。同社の福島伸一董事長・総経理によると、新型コロナウイルスの影響で現地の従業員が不足し、業務が一時滞りかけたが、「コロナ禍をチャンスに」と業務のIT・ロボット化をさらに進めている。

在留邦人は生活の心配も尽きない。日本の家族との二重生活、日本に一時帰国中の子供の教育、処方箋薬の入手困難など、心身の健康も懸念される。外国暮らしの重圧は大きい。

こうした中、横浜市の友好都市でもある上海市の人々が「困っていないか」「寂しくないか」と日本人を支える姿を何度も見、経験もした。温かさに感謝しつつ、感染症が早く収束し、自由に往来できる日が来ることを誰もが切望している。

（横浜市上海事務所長・川島 とも子）



業務のさらなるＩＴ化、ロボット化を進めていると話す、福島伸一董事長・総経理＝17日、蘇州市